

ぬ。佐四郎はお百度を。廻りしまうて神樂所の前に平伏し。拍手ちよん／＼。南無座摩大明神。油屋の娘お染を私が女房に持ちまする様に。どうぞあつちから惚れまする様に。なむ神明なむ稻荷なむ八幡。なむ大師遍照金剛なむ觀世音菩薩。申し／＼佐四郎様ちやござりませぬか。ヤ油屋の小助か。わが身やいつの間にこゝへおちやつた。イヤたつた今來て後からお前の怪やきを聞きました。聞いたかエ、面目ない。山家屋の佐四郎ともいはれる者が。戀なればこそコレ此錢ざしを見てたも。シタリ百度参りとはきつゝ凝りやう。イヤ凝つた段ではない。元油屋の家には親どもから。百貫目餘の取りかへ。それを急に催促せぬはあの娘故。後家のお勝にとうから言込んで。結納まて入れてある。それに今日此頃後家が言分には。いかにも上げませうけれど。縁

の事は親のまゝに無理押しにもなりませぬ。あれが心を聞いてからの何のかのと埒が明かぬ。そこでわが身に植打たさうと思つて時々用の無心。イヤ羽織の裏がほしいの。加賀の禪を買ふはの。髭剃の色拂ひまで吞込んで遣つた此山家屋。それにマア。おつといふまい。働きが鈍いと仰しやるのか。慮外ながら急度働いて居ますぞえ。それならこそお前のお望み。十分の物九分は埒が明いてある。ヤアそりや真かいやい。真か嘘か此間の文の返事。かはいらしいお染が筆。爰に持つて居るけれど。さういふお前の請なればマアお目に懸けまいわい。ア、こりや拗強すちやつと見せてくれ。見せたら此働きた代は。ハテ此望みが叶うたら。禮はきつと飯櫃形でするわい。マア其文を。イヤ減多に代物手放されぬ。當世掛商は浮雲い。マア後での禮は禮。先へちつと力

付かぬと勢がない。かうせう。此文私が讀んで聞します程に。よい返事の文句なら冥加錢を上げさんせ。えいか。さらば開帳致さうか。ハア何ちや。ようぞや御文下され嬉しく拜し參らせ候。ソレ嬉しいと書いてあるぞえ。誠に數ならぬ我が身に淺からぬ御しんもじの程。身に餘り忝う存じ／＼。ソレそこで冥加錢。地心得たしなみ銀入から。豆板一つ。同サア／＼其後は／＼。身に餘り忝う存じ／＼へども。母様のある身にて任せぬ譯御座候へば。先づ／＼御斷り申上げ／＼。ヒヤアこりやどうちや。サ、々、爰が味ちや。母親の許しさへ出たら。私はお前に添ひたいといふ事ちやわいな。又々母様に尋ね候へば。縁の事はどうなりとそなたの好いた殿御を持てと御申しなされ候故。それは／＼嬉しく存じ／＼とけつかるわい。エ、忝い。冥加錢。ノリ今度ははず

んで二朱一つ。ヨツトしめたと又着服。
聞さうして跡はく。嬉しう存じくへ
ども何分私はお前がいやにて御座候。イ
ヤアいやく急ぐまいく。こりや是ち
つとした読みやうぢや。私を。お前がいや
であらうといふひぢりの文ぢや。其證據
は後にあなたにも私を御なぶりの事と推
し參らせ候。ソレくく。もし又眞實
にて候はゞ誓文々々私が事は。ソレ爰が
肝心の性根ぢや。今度は一分ぢや冥加錢
冥加錢。サア遣るわいやい。マア氣がせ
く跡を早う聞かせいやい。誓文々々私が
事はふつつりと思ひ切り下され候。何の
因果にお前の様な男に。ヤ何と其跡はど
ろぢや。サア此跡は。イヤもう聞きな
んすな跡はほんやくたいぢや。一分一つ
井戸へ落したと思はんせと。聞いて佐
四郎はおろく顔。お性根取られた鼻紙
袋。下地が抜けた緋ばかりの。百度參り

もッ恨めしき。聞申しさう力落したも
のでもない。お前の戀の邪魔といふは久
松といふ丁稚め。何でもこいつに腐り付
いて居ると見えます。尤も男はいいつよ
りちつとお前が次なれど。肝心の所で喰
付かしたら。乗りかへるは知れてある。
サイヤイおれが背中の髭のすんに。これ
程な疣がある。こいつが前後に振りかは
つてある位なら。恐らく前髪奴には仕負
けぬものを。残念やと。糞を塗つて。ッ
無念がる。聞イヤ申し物には祈禱といふ
事がござります。幸ひあそこに山伏があ
る。久松とお娘と縁切をお頼みなされぬ
か。ホンニ是は氣が付かなんだ。第一お
れが戀が成るか成らぬを見て貰はにやな
らぬ。シタガもしひよつと成らぬとい
うたら。又十二文損するのぢやと。根がし
はんぼの安物から。網にかゝつたッ鼻
居の前。占ひ。御判墨色相性の考へ。見て

上げませうお入りと。呼込まれるをし
ほにして。はひる佐四郎さしこんだ小助
が相穂。聞あなたの年とは三十一でござ
りますな。三十一。當年三十一歳の男
お生れ年が寶永六年己丑。御一代の守
本尊は月の廿八日不動明王性は火にし
て則ち住所より南少し東に當り水邊に待
人あり。女と見えます。こりや色事でござ
るな。旦那何ときつかく。成程此旦那
大色事師でござります。八卦の面にさう
見える。トキニ其許様は丑の年で牛の寐た
程金銀を持つてござる。此度東に當つて
金銀の星が顯はれます。是が其許様の
年頭に當る。即ちかの金銀の勢で此女は
お手に入る筈ぢやが。爰に一つ障りがあ
る。其許様には背中の靨に疣が一つあら
うがの。イヤアアア見通しぢや。ッ。
サアく無けりやならぬ理ぢや此疣の
有りが悪い。惣體背中には疣は背疣と

いうて。只今師走には或は牛房鯨鯨何なれ角なれ人に物を遣るばつかり。錢銀を取られるばかりで是まで頼んだ事が一つも埒が明かぬと見えます。とんと其通り。さうあらう。時に又一つ大きな邪魔がある。ハテかはずた物四角な物ぢやが。坎畏震巽りかんがすかん。兌中斷と取つてだゝぼたの兌の卦に當る。人相に取つてはこりや前髪と見えます。かの金星銀星が寄合はうとする中へ。此前髪の眞鍮星が毎晩夜道星になつて邪魔するといふ卦體サアそれがけたいでなりません。どうぞ其前髪を。此法印が行力で行り殺して進ませませう。先づ縁結びの星祭こりや其許様のお家へ參つて致さしやならぬ。サアそれが第一お頼み申したい。申さぬ事は聞えぬが金銀の星を祭るは同氣相求めるの道理で。金銀の元入が餘程入ります。サア何ぼでも大事な。供物は隨分大き

な鏡餅十二重ね跡は法印が受納致す。さて祈禱の間酒肴で我らを御馳走なされるがよい。かく申せばとて手前が食ひたい飲みたいではござらぬ。即ちそれが星様への御馳走。物をほしがるによつてこれ星なり。祈禱始めに宮内の福屋でマア一寸御神酒上げよかい。旦那こりやよござりましよと。おだてる太鼓神樂所の鼓片手にフシ精禱宜が。調山家屋佐四郎様。御献上の神樂が只今上りますサアお出でなされませ。これはいかな様で、交せてどんちやんと。これもやつぱり今の願。モウ神様を頼むに及ばぬ。コレ神樂の酒手ぢや貴様も御神酒の相伴さすぞ。イヤ有難いわさらば福屋で腹存分。福宜山伏のフシ位争ひ。願主様まづお入りと。鼓よりまづ舌つとみ打ちつれ茶屋へフシ勇み行く。地小助はそろ／＼小戻りし。手招きすれば最前より。待ちかね山師

の浪人者鳥居の陰より又一人。これも手合と顔見合せ三人一緒にフシ寄りこぞる。地中にも勸六氣をせいて。調シテ件の物は。コリヤ聲が高い。あの井の内に仕かけて置いた。この鈴木彌忠太久松めとは仔細あつて意趣のある中。彼奴めをしくじらす工面は小助。かう／＼合點か。よし／＼。彌忠太様は勘六と。福屋で飲んでござりませ。前髪めが戻るを待つて。手工合首尾よう／＼と地耳から耳へ相談ささり。しめて三人フシ別れ行く。地人一盛。夢の世や。浮名の。端の種油一人娘と。寵愛の。お染が思ひ日に千度行きつ戻りつ蝶々の。縫の模様を振袖に。包むとす宮居に歩み来る。地下女のお傳が申しお染様。調宮内の茶店でもちとお休みなされませ。地私はこゝに張番して彼の人が見えたらコレ斯うと。いへばお染

はほ、笑みながら。神のお庭で勿體ない
差合のない時に。顔を見るのが樂しみと。

ッ侍つ人よりも待たるゝ身。久松はい
きせきと屋敷の用事そこゝに。ッ足
下かろく立歸る。地お染は見るより。コ
レ久松様といはれもせず。こゝにゝと
寄添へば。久松も途中の面目。詞コレお傳

殿小助殿は見えなんだかと。地いひつゝ、
邊に氣を付くれば。呑込むお傳が。詞申
し御寮人様。わたしやあの綱八の芝居が
一切見て参じたい。ホンニそなたは芝居

好き。戴入でなけりや行かれぬに。けふ
は幸ひ勝手に往ておぢや。随分緩りつと
だんないぞや。ハイ。そんなら往て
参じよ。久松殿もお染様と。どこぞそこ

らへ戴入さんせと。地はづすは猫に狸木
の。氣を通り札鼠木戸。ッこれも忠義
と行く跡に。地契りし中は詞數。いはず
取る手を振放し。詞申し御寮人様。お前

様は追付けえい男お持ちなさるげな。
私は下人の事。何とせうしよ事がないと
いて拗強るはやつぱり愚痴。勿體ないお

主様が。これまでのお志眞實冥加なう存
じますと。地押下れば摺寄つて。詞コレ
それはマア何の事。内では人目があるに
よつて。久松。と家來あしらひ。地様

といふ字は。口の中で。常住消して居る
わいの。詞せめてこんな所なりと。女
房がお染かと。地いうて満足さしもせず。
お前様の御寮人のと。献上向な挨拶はま

だわしが氣を疑うてか。そもや。見初め
し其日から。詞エ、こんな事何やかや
いひたいけれど。人が見るので何にもい
はれぬ。地どこぞ人の聞かぬ所で。しつ

ぽりと咄したい。こつちへおぢやと。ッ
手を取れば。詞さうぢやて、茶屋の内も
やつぱり人目。地どこぞ暫しの隠れ家と。
覗く八卦のかこひの内。詞ヤア誰もない

わいの。地外から襖は戀の塙。サア此間
にちやつといのと。手を引く主従三世相。

二世を兼ねたる妹背鳥。ッ忍び入るこそ
わりなけれ。地神樂の鈴も時移る。ほろ
酔機嫌に法印は。とろ。目して鳥居前。

詞エ、きやつも呑いやつぢや。喰はれも
せぬ吸物にたつた酒三銚子。ホンニ端酒
飲まうとて店を明けたは不用心。山伏が
物盜まればは見て貰ふ所がない。ヤ、何

やらぶつ。呷くやうな。此内に人の聲
あるは。地ハテ怪しやと駿籠の内。差覗
いて悔り仰天。遣入られもせず氣は上ず

り。繪馬上つた一來法師。立ちすくみ
になつて居る所へいきせき。ッ走つて下
男。詞コレ。法印様一つ見て貰ひたい
と。地入らんとすれば。詞ア、コレ今内へ
遣入ると水火金亂騒ぎ。木火土金粹を
きかせいやい。八卦なら爰でもついで
やる。失物が走りか心中が。つた者なら

奇妙に所を指^さいて見せるぞ。イヤそんな物ぢやない。こちの旦那山家屋の佐四郎様が。今朝から今にお歸りなされぬ。ム、それがよいわ。この山伏が行力を以てたつた今こゝへ天降^らして進せる。佐四郎様。ヲ、法印坊そこにかと。地出て来る佐四郎にすれ違ひ。そつと後の襖からッシ鳥居の中へ行く二人。地戀しいお染と夢にも知らず。調サア〜。一時も早う星祭。是から直に手前が宅へ。そんなら參ろか。イヤ待つたり肝心の商賣道具。地持參致そと園の内。調ヤア。テモ素早い奴もう逃げをつた。さては今のがかの前髪めであつたな。ようぼん代を喰逃げにしをつたな。よい〜此意趣返しはたつた今。お染がお前に靡く様に祈り伏せるは我が數珠先。歌さんげ〜六根大聖南無不動明王〜。なんぼうに見つとむなうても。男はれこち喰はねば立

ため。身代よしの山家屋で。腥料理喰ひ次第。蒸菓子羊羹責めかけ〜榮耀のありたけえいさらさ〜。さしものお娘も喰につき。魂の返るは今の中と勇んで立し噴嘩々々と騒ぐ聲。驚き出づる久松お染。下女もとつかは久三の小助。一所にッシ落合ふ床几の上。地喧嘩は振物國侍。相手は町人胸ぐら取られ。引立てられてもひるまぬ男。調こりや何とさつしやります。何ととは素町人め。武士の足を泥脚で踏みながら御免ともぬかさぬ慮外者め。サアえいわいな。慮外ならあやま分。マアこゝを放さんせ。踏んだはおれが脚踏まれたはこな様が脚。武士ぢや町人ぢやて、脚に違ひはあるまい。そんなこつき喰ふ男ぢやない。聞かぬというてどうさある。お太刀ひねくつたとて滅多に切られるものぢやない。人戯えせずと

お侍。どうなと地召されとすり寄る體。調エ、汝しきぶち放すも刀の穢れ。地どうしてくれうと傍邊。有合ふ財布眉間へばつしり。ハツト驚く久松を。お染が抱きしめ押ゆる袖。氣をもみ裏の裏へ行く小助がきつとコレ申し。調あの包は手前の銀財布。斷りもおつしやらすお侍には似合はぬ仕方。誠にこれは心せくまゝ手前の鹿相。眞平〜。なむ三寶。少々血が付き申した。幸ひの井の許と。地清むる穢は薄けれど包みし悪事すりかへる。手目を見せじと小助が氣配り覆になつてッシ立納の。地財布手早く。調コレ久松此銀は懐へ。お染様掛り合になりや悪い。私もお供サア〜早うとせり立つる。地工の底は白齒のお染。久松早うと手を取つてせはしい所が結ぶの神。足を早めてッシ立歸る。地跡は人たえ宮芝居の。切のめりやすすしめやかに。啼く二人が仕濟し

顔。彌忠太様首尾は。ヲ、件の物は手
洗鉢の下にある。地うまいくと立寄つ
て財布取上げ。彌忠太様。今日の働き
代はえ。ソレ金二兩。エイ肩間に疵まで
付けられて。たつたこれかいな。サアよい
わ。其壹貫五百目どうで小助にも。口錢
やらにや聽きをるまい。そんならふてう
はどやでせう。ぐれの來ぬ内サアごんせ
と。地銀懐へ取納め運でない顔跡先に。
のしく歩む。鳥居の陰。盜賊待て
と聲かくる。地びつくりしながら騒がぬ
顔。盜賊とは誰が事。おのれらが事さ。
エ、何を證據に盜賊とは。ヤアぬかすま
い。今日此方の屋敷にて油屋の下人久松
に渡せし銀子。子供上りの若いやつ何と
も心許なく。跡より來り窺ひ見るにおの
れ等が騙事。かやうの吟味仕れとお金役
より付け置かれた。岡村金右衛門といふ
者だわい。サアおのれ等引括つて屋敷へ

連行く。腕を廻せと詰めかけられ。ハテ
さう見られたら是非がない。成程其銀は
騙りましたが。此お侍は通り合して連れ
になつたばつかり。何にも御存知ないお
方。私一人纏かけてサアお引きなされま
せ。サアくと油斷を見すまし彌忠太
が。差いたる刀抜打ちに肩先すつばと金
右衛門。同じく抜いて切結ぶ兩方劣らぬ
牛角の早業。彌忠太は八方に。眼を配つ
てソレくとそこをと。聲の助太刀力にて。
強氣の勘六まくり切り。なぐる刀を受損
じたじろく所を付け入つて。兩脚雜がれ
よろくとうんととのつけに。倒れ伏
す。勘六は一息ほつと。人や見ぬかと
見廻す彌忠太。勘六どうした。氣遣ひ
さんすなもうとまつた。ホイ。シテ此捌
きはどうせう。ハテどうというて高ぶけ
り。ヲ、身どもとても此處には居られぬ。
ドレ其銀を此方へ。彌忠太様。お前此銀

取ると笠の臺が飛ぶぞえ。藏屋敷の侍を
ばらしたからは。どうでおりや通れぬ命。
とても助からぬからは。何もかも勘六が
引受けてこな様の名は出さぬ。づきの廻
らぬ内早往かんせくと。尤もエ、あつば
れ男ぢや。縁あらば重ねて。細言いはすと
早うくと。ヲ、さらばくと地し別る
る跡。勘六めた勘六そろくと。死骸の傍
へ立寄つて。彌首尾よう行たぞ。ヲ、も
うよごんすかと地むつくと起きる體は血
まぶれ。勘六殿今のでよかつたか。よい
ともくと。物した物を又こつちへ。これ
も貴様の切られ様が上手なから。何ぼ切
つても疵痛みせぬ。紀州の源藏大儀でこ
んした。ヲ、サそこらをさす物かいやい。
シタガ餘り拍子にかゝつて。よつ程の
疵。いたみやせぬか。何のいやい。もう
最前吉野丸付けて置いた。それを知らず
に今の侍めが。逃げて去にをつたさま。

コリヤ此位の疵はたつた一付で直るわいな鼻垂れめが。ソレ酒代の一兩。忝い。サア、これからこちらの商賣。紀州源藏様お歸りぢや。ア、コリヤ立前所ぢやないアレもう芝居が果てる人の見ぬ間に早う行け。チョン、幕際綱八の。切狂言の果太鼓音に。紛れて 三

野崎村の段

年の内に春を迎へて初梅の花も時しる野崎村。久作といふ小百姓せはしき中に女房は、萬事限りの臍病。娘おみつが介抱も心一ばい二親に。孝行白の石よりも堅い行儀の練外れ。フシ在所に惜しき育ちかや。冬編笠も襦袢もすまたの彈語り。御評判の繁太夫節。本は上下綴本で六文。お夏清十郎の道行。長あづまからげのかいしよなきこんな形でも五里十里。ナホス、通通らしやれ。母

様の煩ひで三味線も耳へは入らぬ。手の隙がない通つて下され。清十郎涙ぐみお夏が手を取り顔打眺め。同じ戀とはいひながら。お主の娘を連れて退く。これより上の罪もなし。ナホス、聞きとむない。通りや、と、いふ聲に。久作は納戸を出で。大坂ではやる繁太夫節そなたにも聞かしたけれど。病人の氣に構はう本など読んで氣晴ししやと。義理ある中も子を思ふ恵みは厚き古合羽の。煙草入からこつて、錢取出して。十郎。道行戀の濡草鞋。コレ見や。このお夏は手代と念頃して。姫路を駈落する道行。同じ娘でも世は様々。纒か三里の大坂へ芝居一つ見にも行かず。今度の大病から目の見えぬは、の介抱。達者なおれが喰物まで其様に氣を付けてたもる孝行娘。もし勞れでも出ようかと。おりや

それを案じるわいなう。ヲ勿體ない事はしやんす。煩うて居さんす母様より。健なお前のお心苦勞。せめてもの手助けと思つたばかり。其様な事苦にやんで煩ひでも出ようかと。私やそれが悲しうござんす。河ハテわつけない。したが百日と限りのある婆が大病。案じるも無理ではない。ガ玄庵殿の加減の薬で。今朝から末の椀蓋におも湯が二杯通つた。見かけによらぬ巧者な醫者殿。ヤ幸ひ今日は日和もよし。久松が親方殿へ歳暮の禮に往て来る程に。随分薬に氣をつきやと、いひつゝ、脚絆草鞋がけ。フシ紐引きしむれば。父様とした事が。此短い日にモウ晝過ぎ。明日の事になさんせいで。何のいやい。年こそ寄つたれ此足に覺えがある。一時三里犬走り日暮までには戻つて来る。歳暮の祝儀は。コレ、此薬の芋は饅になる。久松が年が明いたら

ば。われは又お内儀になる。それ楽しみに
よう留守せい。ドリヤ往て来うと。地身拵
へ。薬箱肩にヤえいとこな。表へ出でしが
立ちどまり。調取分け今年は早う咲いた
此梅。何よりかよりよい土産と。地春待ち
顔に咲く花を。手折つて苞に一枝を。添
へてひよか〜野崎村。跡に見なして。

ッ出でて行く。地影見送りて久松が事
のみ思ひ兎や角と。胸に一ぱい半分の水
量り込む薬鍋。一トへき入れる生妻より。
辛い面つき久三の小助。久松。ッ引連れ
入口から。調久作内に居やるかと。地づ
つと這入れはおみつは嬉しく。調ヲ、久
松様ようマア戻つて下さんした。定めて
あなたは送りのお方。地お茶よ煙草と嬉
しさに。立つたり居たり氣もそどろ。調エ
エヤかましいわい。うそ穢い在所の茶飲
みにはこぬ。コリヤ追従せずと聞いて置
けよ。此久松めが親方の銀。一貫五百目お

山狂ひにちよろまかしたによつて。今日
連れて来たはな。久作と三つ鐵輪で詮議
するのぢや。親父を出せ〜〜と
ッ辰巳上り。地身の誤りに久松が差俯向
いて詞さへ。無いには若しやと思ひなが
ら。調お腹立はお道理ながら。何のマア
久松様に限つてよもやさうした事はある
まい。定めてこれは何ぞの間違ひ。覚え
がなくはないといふ。ツイ言譯をして下
さんせいな。ハ、べるは喋るは。コリヤ
ヤイ頭こそ前髪なれ其素早さ。傍輩には
辭宜もなしに。取つて置きのお娘まで。

此跡はいはずにこます。裾貧乏のはつた
行過ぎ丁稚め。首綱のかゝる事言譯に如
才があるかい。小倉の屋敷へ請取りに往
た爲替の銀。御役人から改めて渡つたは
正眞。内へ戻つて明けた所がわやひんの
胸腹。道の間ですりかへた品玉の太夫。
早咲久松でございます。ハリトウ〜。白

眼刻くは無念なか。無念なら銀立てるか。
あるまいがな。サア久作は何所に居る。
地出さらずば引出さうと。駈入る袂を久
松引留め。調成程銀を摺替へられたは皆
私が無調法。身の明りの立つ迄は在所へ
行けど。後室様の結構な御料簡。それを
そなたが。ヤイ〜何ぬかすぞい。
そりやわれが勝手料簡の間損ひ。おれに
は此詮議仕ぬいて来いと。内證で後家御
の言付。ぢやによつてめつきしやつきす
るが何ぢや。ひんこめ出されと。地大聲を。
お光が押へて。調コレ申し御尤もござ

んすけれど。奥の病人によい事がましろ
聞かしましては。病氣の障りもそつと靜
かに。イヤ高ういふのぢや。〜。これ程
喚くに聞耳潰すは親仁もぐるの仕事ぢや
な。イエ父様はあなたの方へ。歳暮の禮
に往かれました。どうして道が違うた事。
もし持病やなど發りはせぬかと。地外も

気がかり病床への聞えも氣づかひ久松が。身の言譯に。スエテ差込んだ。癪を覺えるばかりなり。彌駒みへ付込む悪者根性。大坂へ往たが定なら否ながら道で逢ふ筈。そんなてれんぬかなやい。ドレもう家捜と出かけざるまい。悪邪魔ひろぐなとおみつを引退け。取付く久松面倒など。踏むやら蹴るやら無法の打擲。詮方もなき折からに。道引返しつきせき戻る久作駈け入つて。小助を引退け突飛ばし。留守の間へ来てわつばさつば様子によつて料簡せぬぞ。ヲよう戻つて下さんした。最前から久松様をな。ヲ、よいてや。久作が戻るからは娘もじつと落付けと。納める程業腹煮し。大まいの銀引負したそのばりめ。詮議に來た小助は親方の代。それを又わりや何で投げたのぢや。これは迷惑な。雲雀骨見る様な手で。血氣なこなた投げたのではな

い怪我のはすみ。出端れの曲途で道が遠うて。留守の間へ大坂から息子が來たぞやと。若い者どもが知らしてくれた。行き戻り五六里を助かつた徳安境。引返し戻つたが。そんなら何か其引負で久松は戻つたか。ア、それ聞いてマア落付いた。マア、何角は差措いて傍輩衆のお世話であらうと。蔭ながら言うてばつかり居ますわいの寒い時分によう連立つて來て下さつたなう。ソレおみつよ茶なと汲まんかいやい。コリヤ納めなく。わりや夢に見た事もあるまいが。一貫五百目といふ銀高。子の科は親にかゝる。銀立てるか。但しは又願はうか。二つ一つの返答聞こわい。ハテよいわいの。其様に息せいはるは大きな毒。兎角人間は心長う持つのが藥ぢや。ヤ其藥で思ひ出した土産にせうと思つたこの山の芋をとろゝにして。出來合の麥飯を進ぜうかい。置けや

い。見せかけばかりの正直倒し。麥飯のとろゝのと。ぬらくらとは抜けさせぬ。あんだらくさいと。彌駒散らす藁苞。破れてぐわりと出る丁銀。ソレ久松が引負の銀。渡したならば言分あるまい。とつとと持つていなしやれと。聞いておみつも久松も思ひがけなき驚きに。小助もぎよつとしながらも包改め。コリヤ正眞ちやチモ出難い所からよう出たな。吹きや飛ぶ様な内のさまで。泥龜三つで一貫五百目請取るからは言分ないわい。ヲ、そつちに言分がなうても。こつちにぐつと言分がある。と言ふも古いものぢや。これまでお世話になつた親方様。御恩こそあれ恨みはなけれど。人に欺され取られた銀引負の悪遣のと。無い名を付けて貰うては世間が濟まぬ。というて無理隙取るではない。親が暫く預つて置く程に此通りうたがよい。モウ二十年おれが

若いと。わこれにはぐつと馳走もあれど
入らざる殺生。サア〜早ういんだらよ
かろと。地言はれてどうやら底氣味悪く。
銀の出入さへ濟んでしまや外の事はお
構ないさらばお暇申さうと。地打透取出
し、フシ捻込み押込み。調ハ、ア命冥加な
一貫五百目。内へいんで出した所が藁。
になつて居やせまいか。ハテ仇口をきか
ずとも足元の明るい中。ヲいないぢや。
銀こそは主の物。何のそのおれがでに。
おれがかたげて。おれが足で。おれが歩
いて。おれが體がいぬるに。ぐつとも言
分ない筈と。地へらす口して。とつば門
口柱で天窓。アいたし小助は足早に。フシ
大坂の方へ立歸る。地おみつは親の氣を
かねて。いらへ無ければ久松すり寄り。
此身の手詰は通れてもこのお暮しで。
餘程の銀。跡でお前の御難儀には。ハテお
れぢやとて相應のかくまひはせまいもの

か。始末してためたあの銀は黒谷の方丈
へ上げる冥加銀。氣遣しやんな。まんざ
らあればかりでもないわいの。改めてい
ふではなけれど。未はわが身と一つにす
る約束でこのおみつは婆が連子。あれも
否でもないさうなり。折もあらば親方殿
へ暇の事を願はうと思つてゐたが。これ
がほんのもつけ重寶。もう大坂へいなし
はせぬ。早却なれど日柄もよし今日祝言
の盃さすぞ。何とおみつよ嬉しいか〜
〜。我等はまた天窓を丸め参り下向に
打ちかゝらうと。頼み寺へ願うて袈裟も
衣もちやんと請けて置いたてや。幸ひ餅
は搗いてあり。酒も組重も正月前で用意
はしてある。サア〜早う持らやと。地
藪から棒をつつかけた。親の詞に吐胸の
久松。知らぬ娘は嬉しいやら又恥かしき
殿まうけ。顔は上氣の茜裏袂くはえるお
ぼこさを。見るに付けても今更に。否應

ならぬ親の前念に思案も出の口の。壁に
いの字を、フシかき一重。地裏の病床に咳
嗽く聲。ホンニこちらの事に取込んで定
めて婆が淋しからう。久しぶりて久松に
がよい。ハテ俯向いてばかり居すとおみ
つ胸も刻んでおけ。久松おぢやと。地先
に立ち悦び勇む親の氣を。知つて破らぬ
間合紙、オトリ襦。へ引立て入りにけり。地
跡に娘は氣もいそ〜日頃の願ひが叶う
たも。天神様や觀音様。第一は親のお蔭。
調エ、こんな事なら今朝あたり髪も結う
て置かうもの。鐵槌の付け様。地挨拶も
どういうてよかるやら覺束なます拵へ
も。祝ふ大根の友白髮。末菜刀と氣も勇
み手元も輕うちよき〜。切つても
切れぬ戀衣や。本の白地をなまなかに。お
染は思ひ久松が。跡を慕うて野崎村。オッ
堤。傳ひに漸うと。梅を目當に、フシ軒の

つま、地供のおよしが聲高に。調申し御寮人様。かの人に逢はうばかり寒い時分の野崎参り。今船の上り場で。教へてもらうた目印の此梅。大かた此所でござりませうぞえ。ヲ、もそつと靜かにいやいな。久松に逢ひたさに。來ごとは來ても在所の事。目立つては氣の毒そなたは船へ。地早うくとヲ追ひやりと。地立寄りながら越えかぬる戀の時のヲシ敷居高く。調物申お頼み申ませうと。地いふもこはく暖簾越し。調百姓の内へ改つた。用があるなら遣入らしやんせ。ハイく率爾ながら久作様は内方でござんすかえ。左様なら大坂から久松といふ人が今日戻つて見た筈。ちよつと逢はして下さんせと。地いふ詞つき委かたち。常々聞いた油屋の扱は。お染と悟氣の初物胸はもややくかき交館組板押しやり。ヲシ戸口に立寄り。地見れば見る程エ、

美しい。調あた可愛らしいその顔で。久松様に逢はしてくれ。そんなお方はこちや知らぬ。餘所を尋ねて見やしやんせ。地阿呆らしいとヲシ腹立ち思は。調ホンニまあ何ぞ土産と思つても急な事。コレく女子衆。さもしけれどもこれなりと。地夢にもそれと白玉か露を袂紗に包の儘。差出せば。調こりや何ちやえ大所の御寮人様。様々々と言はれても心が至らぬ置かしやんせ。在所の女。と梅つてか。欲しくはお前にやるわいなと。地やら腹立ちに門口へ投ればほどけてばらくと。草に露銀芥子人形。微塵に香箱割れ出した中へつかく。ヲシ親子連。地出てくる久作。調どうちや館は出来たであらう。さて祝言の事婆が聞いてきつ悦び。ちやが年は寄るまいもの。さつきやつさもつさで。取上したか頭痛もする。いかう肩がつかへて來た。ア、橙の数は

争はれぬものぢやわいの。左様ならそろく私が見上げてませうか。ソリヤ久松忝い。老いては子に隨へちや。孝行にかたみ恨みのない様に。コリヤおみつよ。三里をすゑてくれ。アイくそんなら風の來ぬ様にと。地何がな表へ當り眼。門の戸ヲシびつしやりさしもぐさ。地燃ゆる思ひは娘氣の。細き線香に立つ煙。調サアく親子ちやとて遠慮はない。艾も疔癖も大綱にやつてくれ。アイくきつう痞へてござりませうぞえ。さうであらうく。序に七九をやつてたも。ヲツトこたへるぞく。サア据ゑますぞえ。アツツくえらいぞく。あすが日死なうと火葬は止にして貰ひませう。丈夫に見えてももう古家。屋根も根太もこりや一時に割普請ちや。アツ、、、、、ヲ、父様の仰山な。皮切は仕舞でござんす。ホンニ風が當ると思や。誰ちや表を明けたさう

な。縮めて参じよと立つを引止め。ハテよいわいの。晝中。酔陶しい。ナウ久松くくコリヤ久松餘所見ばかりして居すとしかくと揉まぬかいの。サア餘所見はせぬけれど。エ、覗くが悪い。折が悪い悪い。くくと。目顔の仕かた。アア悪いの覗くのと。足に灸こそすゑてくれ。何所もおみつは覗きはせぬ。サアアノ悪いと言ひましたは。儲か今日は瘡癩日。それに灸は悪い悪いくくとというたのでござります。エ、愚痴な事を。此様に達者なは。ちよこく灸すゑ。作りをするそこで久作。アツ、。ニ、何ちやわい。わが身達も。達者な様に灸でもするのをおいらへの老行ぢやぞや。ヲさうでござんすとも。久松様には振袖の美しい持病があつて。招いたり呼出した。り。憎てらしい。アノ病ひづらが道入らぬ様に。敷居の上へ大きくしてすゑて置

きたい。コレおみつ殿。振袖の持病のと。色々の耳こすり。はしたない事聞いてるぬぞや。ホ、。變つた事がお氣に障つた。ヲ、障らいぢや。こりやをかしい。其譯聞くぞえ。いふぞやと。我を忘れて譯を。外に聞く身の氣の毒さ。振の肌著に。コリヤ肩も足もひりくするがな。ア、コリヤ汗。久作も持てあつかひ。く。まだ祝言もせぬ先から。女夫いさかひの取越かい。灸業の代り。喧嘩の行司さすのかいやい。二人ながら嗜めく。イエく構うて下さんすな。今の様な愛想づかしも。病ひづらめがいはしくつさる何をいふやらモウく兩方とも。おれが貰ひぢや。ヨヨ。中直しが直に取結びの盃。髪も結うたり。鐵槌もつけたり。湯もつかうて花嫁御を。コリヤ作つて置けと打笑ひ。フシ無理に納戸へ連れて行く。其間連しと駈入るお染。逢ひたかつ

たと久松に。エ、縫りつけば。アア、コレ聲が高うござります。思ひがけない此所へはどうして。譯を聞かしてくくと。問はれて。フシ漸う顔を上げ。譯はそつちに覺えがあらう。私が事は思ひ切り。山家屋へ嫁入せいと。残しておきやつたコレ此文。そなたは思ひ切る氣でも。私や何ぼでもえ切らぬ。餘り逢ひたさ懐しさ。勿體ない事ながら。觀音様をかこつけて。逢ひにきたやら南やら。知らぬ在所も厭ひはせぬ。二人一所に添はうなら飯も炊かうし織り紡ぎ。どんな貧しい暮してもわしや。嬉しいと思ふもの。女の道を背けとは。聞えぬわいの胸欲と。恨みのたけを友禪の。振の袂に北時雨晴間は。フシ更になかりけり。勝なる久松も。背撫でさすり聲ひそめ。其お恨みは聞えてあれど。十の年から今日が日まで。船車にも積まれぬ御恩。仇

で返す身のいたづら。冥加の程も恐しければ。委細は文に残した通り。山家屋へござるのが母御へ孝行家の爲。よう得心をなされやと。いへど答も涙聲。否ちや〜私や否ちや。今となつてさう言

やるは。これまでわしに隠しやつた。許嫁の娘御と女夫になりたい心ちやの。是非山家屋へ行けならば覺悟は疾うから極めて居ると。用意の剃刀取直せば。それは短氣と久松が。止めてもとらず。

イヤ〜そなたに別れ片時も。何樂しみに生きて居よう。止めずと殺して〜とエエと思ひ。詰めたる其風情。そんなら是程申しても。お聞分はござりませぬか。添はれぬ時は死ぬるといふ。誓紙に嘘がつかれうかいなう。ハア達て申せば主殺し。命に代へてそれ程迄。思ふが無理か女房ちやもの。叶はぬ時は私も一所に。お染様。久松と互に手に

手取りかはす悪縁。深き契りかや。終後に立聞く親。其思案悪からうと。言はれてはつと久松お染。騒ぐを押へてア、大事な〜。下に住や。

因縁とは言ひながら。和泉の國石津の御家中。相良丈太夫様といふれこさの息子殿。聊の事で家が潰れてから。わが身の乳母はおれが妹。其縁で十年まで育て上げた此久作は後の親。草深い在所に置こより。知慧付けの爲油屋へ丁稚奉公。それ程までに成人して商賣の道讀書まで。

人並になつたはコリヤ親方の大恩。其思も義理も辨へぬは。これ見や。先に買うたお夏清十郎の道行本。嫁人の極つてある。主の娘をそゝなかつとは。道知らずめ。人で無しめ。サコりや清十郎が話ちやわいの。疾うから意見もしたかつたけれど。丁度今の様な事があらうかと。それが悲しき一日延び。二日延びしする間。降つて

わいた銀のもめ事。これ言立に隙を貰ひ分けて置くのが上分別と思ふから。引負の銀の工面。どの様に氣張つても高の知れた水吞百姓。僅かの田地著類著をげ。おみつめが掃箒まで賣代なし。漸う拵へたさつきの銀。生さぬ中でも親子といふ名があるからは。肉親分けた子も同然。

可愛うなうて何とせう。コレお染様ではない。此本のお夏とやら。清十郎を可愛がつて下さるは。嬉しい様で恨めしいわいの。聞いての通りおみつめと女夫にするを樂しみに病苦を堪へて居るアノ婆様に。今の様な事聞かしたら。何と命がござりませうぞいの。若い水の出端には。これらの義理も絲瓜の皮と。投げやつてこなさんといつまでも。添達げられるに

てからが戸は立てられぬ世上の口ちやわいの。エ、アノ久松めは辛抱した女房嫌うて。身上のよい油屋の掣になつたは。コ

レ榮耀がしたさぢや皆怒ぢや。人の皮膚た畜生めと。地在所は勿論大坂中に指さされ。人交りがなりませうかいの。コレくゝゝ爰の道理を聞分けて。思切つて下され。申しコレ拜みますわいのくゝ。是程いうても聞入れず。親御達が満足に産付けて置かしやつた其體を。切りさいて淺ましう死ぬるのが女の道か心中か。サ久松も其通り不義密夫の惡名受け。實親の名を汚すばかりか。世間の義理も主の恩も。むちやくちやにして仕舞ふのが。侍の子か人間か。返事次第で思案がある。眞實親身の強意見。骨身にこたへて久松お染。何と返事も、フシないじやくり。これ程いうても返答のないは。コリヤ二人ながら不得心ぢやの。ア、勿體ない。實の親にも勝つた御恩。送らぬのみか苦をかけるも。私が不所存から。イヤくゝそなたの科ではない。皆此身の徒か

ら。親にも身にも代へまいと。思詰めても世の中の。義理にはどうも代へられぬ。成程思ひ切りませう。ヲ、よう御合點なされました。私もふつり思ひ切り。おみつと祝言致しまする。そんならそなたも。お前もと互に目と目に知らせ合ふ心の覺悟は、白髮の親仁。アノさつぱりと思ひ切つて。祝言をしてたもるか。何の嘘を申しませう。娘御も今の詞に。微塵も違ひはござりませぬか。久松の事はこれ限り。私や嫁入をするわいの。ヲ出来たくゝ。むくつな親仁めと腹も立てず。よう聞入れて下さりました。晩の間の知れぬ婆が命。息のあるうち祝言が濟んだと聞かして下さるが。大きな善根。善は急げぢや。今こゝで盃さそ。おみつくゝとフシ呼立つる。聲聞えてや。病床より。母は漸う探り出で。親仁殿。久松もそこにか。待ちに待つた娘の祝言

嬉しうてくゝ。此間ない氣色のよさ。大煩ひの上目まで潰れた因果人佛様のお迎ひを待兼ねたに。難面い命があつたりやこそ。悦ぶ聲を聞くといふも。孝行な久松が蔭。ふつゝかな在所生れ。心には入るまいけれど。末の面倒見て下され。頼みまするといふ中も。痰火は胸にせき上せば。エ、此寒いのに寢所にやつぱり居たがよござります。冷えれば悪いと蒲團の上。抱きかゝへて久松が。介抱如才納戸より。親子の中も丸盆に乗せた盃銚子鍋運ぶ久作。コレお婆。やつぱり寢ては居やらいで。したがる鳥臺の無い代り。世話事の尉と姥も新しい。目の見えぬは目出度い秀句ぢや。ハ、ハ、ハ、ハ、エ、目出たい序に。此嫁は何所に居るぞい。おみつゝと尻軽に。立つて一間を差覗き。ハテ出ぐすみをして居るは。それでは果てぬと手を取つて。サアくマ

ア、嫁の座へ直つたり。エ、トキニ一家一門著の儘の祝言に。改つた綿帽子。地うつとしからう取つてやると。脱がすはすみにも筈も。抜けて惜しげも投島田。根よりふつと切髪を。見るに驚く久松お染。久作呆れてこりやどうぢやと。いふ口抑へて。コレ申しと、様もお二人様も。何にもいうて下さんすな。最前から何事も残らず聞いて居りました。思ひ切つたといはしやんすは。義理に迫つた表向。底の心はお二人ながら。死ぬる覺悟でござんしよがな。サ死ぬる覺悟で居やしやんす。母様の大病。どうぞ命が取りとめたさ。私やもうとんと思ひ切つた。ナ切つて祝うた髪かたち。見て下さんせと兩肌を。脱いだ下著は白無垢の首にかけたる五條袷袢。思ひ、フシカ、切つたる目の中に浮む涙は水晶の。玉より滑き貞心に、エ、今更何と詞さへ。涙呑み込み。

呑み込んでこたゆるつらさ久松お染。久作も手を合せ。何にもいはぬこの通りぢや。エ、夫婦にしたいばつかりに。そこら邊に心もつかず苦の花を散らして退けたは。地、皆おれが鈍なから。赦してくれも口の内。聞え憚る忍び泣き。ア、詞冥加ない事おつしやります。所詮望は叶ふまいと思ひの外祝言の。盃する様になつて。嬉しかつたはたつた半時。無理に私が添はうとすれば。死なしやんすを知りながら。どうぞ盃がなりませうぞいな。おおみつの何をいやるやら。女夫になりやるを此母も。悦びこそすれ何の死の。ナウ親仁殿。ソチャワイノとても此世はない縁でも。せめて未來は。ア、イヤ未來までも變らぬといふ。地、盃さそとフシ立上り。地、口に唱名ぶつくと佛壇開けて取出す。花瓶の松に鶴龜もあの世を。ホ、契る心の島蓑。詞サア、斯う

してなりと盃さすのが。せめてもの心ゆかし。エ、いひたい事だらけぢやけれど。このやうな座敷には。たべつけぬこの親仁。地、三々くどうは言はぬが花嫁。詞一つ飲んで久松へ。ア、目出たい。婆もさぞかし嬉しかる。ヲ、嬉しい段かいの一世一度の娘が。定めて髪も美しう出来たである。さき筈に結やつたか。イエそんなら兩輪か。ヲ、兩輪とも。思ひがけなうすつぱりと。アいやさつぱりとう出来たわいの。ヲ、親父殿のいはしやる通り。自慢ぢやないが髪は大い上手ぢやござらぬ。ホン、前方大坂行の土産に貰やつた薄の簪。けふの曠に差しやつたかや。著物は取つて置きの花色。加賀の裾襦袢。それか。アイそれ著て居るか。アイナ。ヲ、わがみにはよう似合ふぞいの。ならう事なら鐵漿付けて。顔直しやつたおとなしさを。たつた

一目見て死んだら。善行寺様の御印文にも勝つて。未來は極樂往生。ホ、わしとした事が。目出度い中で忌まはしいと。久松必ず氣にかけて。もんなやいのと子に迷ふ。暗き盲目にそれども。知らず悦ぶ母親の。心を察し誰々も泣聲せじとくひしげる。四人の涙八ツの袖。覆竝八ヶの落し水膝の。堤やフシ越しぬらん。見聞くつらさに忍びかね。お染は覺悟の以前の剃刀。南無阿彌陀佛と自害の體。久作あわて押しめ。コレ娘御何が不足で死ぬるのぢやと。聞き間遠うて娘ぞと。母は驚きコレおみつ待つて〜と這寄つて。探る手先に五條袈裟。アヤこの袈裟といひこの頭。どうして髪を切つたのぢや。譯を聞かして〜と。急げば急ぐ程咳きのぼし。病苦に悩む母親を。見るに娘は猶悲しく。コレ母様こらへて下さんせ。添ふに添

はれぬ品になり。私や尼になつたわいな。ヤア〜そんなら先刻にから母が氣を休めう爲。ヲイノ來世の縁を結ぶ盃。此世の縁は切れてあるわいの。ハア。ヲ、尤もぢや〜。そなたは見えぬがいつそまし。傍でまじ〜見て居る心推量してたもいのと。いふ聲咽に詰らせば。アア〜其悲しみをかけるのも此お染から起つた事。死ぬるがせて身の言譯。イエ〜死なねばならぬ此久松。わしから先へと託寄るを。久作剃刀引つたくり。是程いうても聞入れず。是非死にたくばおれから先へ。物の見事に死んで見せうか。爺様が死なしやんすりや。私も生きては居ませぬぞえ。ヲ、娘出かしやつた。むさい在所に育つても貞女の道を辨へて。よう尼になりやつたなう。そこにござるが噂に聞いたお染様か。ち前様や久松を殺しとむないばつかり

に。蝶よ花よと楽しんだ一人娘を尼にして。出かしたといふ心の中思ひやりがあるならば。なぜ存へては下されぬ。折角娘が志無足にするとは。胸膈怒と堪へし涙一時にわつとばかりに取亂せば。アア、道理ぢや〜。アア〜どうあつても死にたくば。婆も娘もおれも死ぬる。三人ながら見殺す氣か。アアそれは。思ひ留つて下さるか。但し死なうか。アア〜と三方が。義理と情と恩愛のしめ木にかゝる久松お染。死ぬる事さへ叶はぬはいかなる過去の報ひぞと前後正體。泣倒れ咽返るこそ。フシ道理なれ。久作涙押し拭ひ。どうやらかうやら合點が行たさうな。コレぞ母御様が案じてござらう。大事の娘御慥な者に。イヤそれには及びませぬ。母が慥に請取りましたと。アア言ひつゝ、這入れば。アア母様。ハアはつとばかりに詞なく差俯向けば。コレお

染か野崎参りしやつたと。聞いて餘り氣あたまも。門送りして。詞これはマア、何とお
 禮を申しませうやら。お辭言致すも却て
 無縁むづかり。せめてものお土産に。折つて置い
 た此早咲。めでたい春をまつ竹梅とお
 家も祭え蓬萊の飾物。幾久松が御奉公大
 事に勤めて此御恩。忘れぬ、フシ證と差出
 せば。心ありけな此早咲。譬へて
 いへば雨露の恵を受けぬ室咲は萎むも早
 し香も薄い。盛りの春を待てといふ二人
 への良い教訓。殊更内に口さがない者も
 あれば。何かに遠慮せねばならぬ。幸ひ
 私に乗つて来た。あの竹輿で。コレ久松。
 そなたは堤お染は船。別れ、に往ぬる
 のが世上の補ひ心の遠慮。左様でござり
 まするとも。お志ぢや。乗つて往にや。
 娘は船へと親類々の。詞に否も言兼ぬる。
 鴛鴦の片羽の片々に別れて。二人は乗移
 れば。そんなら久松もう行きやるか。
 来る正月の藪入を。母も必ず待つて居
 る。兄様お健までお染様。もうおさらばと
 詞まで早改まるおみつ尼。哀れを餘所に
 みなれ棹船にも積まれぬお主の御恩。親
 の恵の冥加ない取分けておみつ殿。斯う
 なりくだるも前の世の定り事と諦めて。
 お年寄られた親達の。介抱頼むといひさ
 して泣音、フシ伏籠の面ぶせ。船の中に
 も聲上げて。よしなわし故おみつ様の。
 縁を切らしたお憎しみ堪忍して下さん
 せ。ア、わつけないお染様。浮世離れ
 た、フシ尼ぢやもの。そんな心を勿體な
 い。短氣起して下さんすな。詞、フシ娘
 がいふ通り。死んで花實は咲かぬ梅。一
 本花にならぬ様。目出たい盛を見て
 くれ。随分達者で。ハイ、お前も御無事
 で。お袋様もお娘御も。おさらば。さら
 ば。さらば、フシも遠ざかる船と。堤は
 隔たれど縁を引綱一筋に。思ひあうたる
 戀中も義理の桐情のかせ杭。竹輿に比翼
 やと、手を引いて、フシ表へ出づれば久作
 染か野崎参りしやつたと。聞いて餘り氣
 遣ひさ。アイヤ氣慰みによからうと跡追
 うて来て何事も残らず聞いた。夫婦の家
 の深切おみつ女郎の志。最前からあの表
 で。私や拜んではつかり居ましたわいな
 う。サア観音様の御利生で。怪我過のな
 かつた嬉しさ。これから直にお禮参り。ホ
 ンニこれはさもしい物なれど。御病人へ
 の見舞の印。鹿末ながらと詞數いはす
 出過ぎぬ杉折を。フシ供の男が差置けば。
 詞マア、冥加もないお見舞。戴きま
 すると取上ぐる。手元はづれて取落せば。
 中よりぐわらりと以前の銀。フシ先刻
 に渡した此銀を。ヲ、表向で請取つたり
 や事は済む。改めて尼御へ布施せめて娘
 が冥加ぢやわいなう。言譯が立つからは
 久松ももの通り。戻つて目出たう正月
 しゃ。取込の中長居も無遠慮。娘もおぢ
 やと、手を引いて、フシ表へ出づれば久作

を。引分くる心々ぞ、ユリ三へ世なりけり

下の巻 長町の段

馬カ、リ鬼は外。福は内。ナホス打納めたる日暮から。晝を欺く長町の夜店賣物家々の春を。請取る質搦屋。賑ふ曰取杆の音。とん／＼疾うからせつきに来る。下女が丸顔とり粉ぬる。鏡の大小子持囃。分相應の年始め、マッ實に神國の證なり。忙しいい中で油屋の小助は肩に風呂敷包。ぶら／＼ン来る餅屋の門。イヤア勘六こゝにか。今日は年越で一日の休み所を透かさず質搦にまで雇はれるとは。きつい精の出し様ぢやな。イヤモこれもせう事なしぢやわいの。何が寡なり宿はなし。年中の飯米は餛飩か餅か。五文取の代五六百。此雇賃で帳消さすのぢや。が貴様の世話でそちの内へ。絞に雇はれて行くにつけ。いつぞやの座摩での仕事。久松めがじろ

／＼とおれの顔を眺めると。どうやら氣味が悪いわい。ハテさて日頃に似合はぬ正直な事いふわい。貴様を絞りに入れて置くのも。久松めを目論にかけて追出す仕事の種油。あすは大晦日仕舞仕事ぢや朝から来てたも。今夜は槌の子でも抱いて寝る晩。そこで我等も随費うてこれから色の所へ行くぢや。ア、さうかして月代もすつぱり。ア、こりや障つてくれな。たつた今床で結立ぢや。ム、それに又其風呂敷は何ぢやぞい。これか。こりや立てに行く大盡衣裳ぢや。内からは著て出られぬ故こゝまで小出し。羽織は即ち此隣の古手屋に洗へて置いた。ヤコレ。此間の茶縮細仕立てであるかな。ヤ何ぢや。もう追付け出来ます。エ、遅い／＼。今夜色に見せに行くのぢや。こゝからすぐに着かへて行き。何でも今夜はえら立てぢや。勘六貴様も辨慶に連れて行く。

其代りおれを旦那あしらひにしてみたも。コレ。必ず久三といふまいぞと。地太平洋の下稽古。隣りへ入ればソ立替る。通季もあら玉や往來の。足も春めく祇園道。主持つ身には年徳の惠方参りそ／＼にせはしう戻る久松が。摺違うたる提燈の。印に目早く見返る女。聞申し。／＼お若い。ハイどなたでござりまする。イヤ卒爾な事ぢやが若しお前はと。地言ひつゝ明りに顔見合せ。聞久松様か。ヤア乳母のお庄。地これはとばつたり小提燈。ヲ、危い灯を消さすと。とつくりと久振りの顔見ませう。半ば元服さしやつてから。お果てなされた丈太夫様にとんと其儘。ヲ、きつとした好い殿ぶりやの。此間の文定めて見やしやんしたである。乳母が日頃の念願叶ひ。今度殿様におめでたで。多くの科人も御赦免なさるゝ折柄。一つの功さへ立つならば丈太夫が倅久松。和

泉の本國へ歸參さするは此時。其功の立て様は。先達て粉失の吉光の守刀。即ち此度のお目出度に正月三日鎧開きにお飾りなさるゝ。それ迄に其刀を詮議して差上げなば。跡目相續相違あらじと御家老中の仰せ渡され。まだ年もあるけれど。親方様へ暇の願ひ。間届けがあつたかまだか。マア年越に健な顔見て。嬉しうござると、フシ餘念なき。親身の詞に久松は。今更國へ往なれぬ譯。明けて言はれず。それはマア嬉しいが。師走の内も今日明日になつて。餘りせはしない急な出世。そうして其吉光の刀は手に入つたかや。さればいな。大坂谷町の質屋にあると聞いた故尋ねに往れば。その質は半年前に流したといふ。かの刀の失せた折から。お國を出奔した鈴木彌忠太。こいつが盗んで立退いたは知れてある。その質の置主の名を尋ねても言はぬから

は。此質屋も相對と思はるゝ。フウ何といやる。谷町の質屋とはもし。山家屋とは言はぬか。マ、それ。その山家屋佐四郎。彌忠太は此長町に居るげな。慥な手懸りあるからは。必ず氣遣ひさしやんすな。まちつとの所ちや煩ふまいぞ。コレ和子。マ、マア私としたことが。やつぱりぼん様の様に。追付け千五百石の若旦那。立派な馬に乗せまして。はいしい同勢お國入り。お目出たう、フシござります。何から何まで乳母の深切。孤子になる久松けふまで命危ないも。そなたの兄久作殿のお情。其刀の質請にも。定めて金がいらうがの。これは足しにもなるまいけれど。重々世話の恩返し。萬分の一步七つ八つ。守袋を開けて出す。はずみに落ちるお染が起請。隠すを押へて。コレ申し久松様。奉公人に似合はぬ黄金。誰に借らしやつたぞ。合點が行かぬ。ア、

イヤ、氣遣ひな事ぢやない。此壹歩は小遣にせいと御寮人様が下さつた。その書いた物は大事の守り。こつちへたもいの。イヤ待たしやんせ。ハテ情深い御寮人様ぢやな。シタガ餘り親方の情過ぎるも善し悪しの。なには兎もあれ。しほらしいお前の志の金預つて置きませう。此書いた物は熊野の牛王か定めて大切な守りであらう。神様の名を書いた物。そこしうしては今の様に。つい満へでも取落せば守りが却つて其身に祟るこりやわしが預かりますと。ちらりと見付けて懐へ。くろめる乳母は守神、フシ胸に納めて。久松様明日は私もお家へ参り俱に暇の願ひ。親方持ちやマア早う往なしてやんせ。諸事は明日と言残し立別れては立留り。コレ申し必ず國へ行くのぢやぞえ。ア、どうやら濟まぬ顔付ぢや。ほんに又油断のならぬ。いつまでぼん様

ちやと思つて居る内。つい坊の親にならんすなえ。コレ怪我さんすな和子。しや仕頼ぬ奉公をと。昔思へばひと筆。催す師走空見返り。往来人絶え長町の。夜店の賣聲。小唄物真似。阿なまいたんやほ。厄拂ひましよ。落しましよヤアラ目出たいな何ばう目出たいな。こなたの御壽命申さうなら。鶴は千年龜ぢやないか。三か。と一所へ。咳きよるの。フシ小働き。ントよい仕事したか。サアひがだいの街妻。侍に逢うて物いふ間に。ちほ引いた。ヤア結構な守りぢやな。中には一歩書いた物も入つてある。日本橋でうふせう。アレく又街妻が。せくとばらに。散る三人を見付けた勘六。シ跡を慕うて飛んで行く。道の刀さすが世を。忍び頭巾の浪人に。小腰屈めて付添ふお庄。胡散者と思召

し。お名をお包みなさるゝは尤も。一昔過ぎた事なればお見忘れなさる筈なれど。此方にはよう覚えてをります。石津の御浪人鈴木彌忠太様。其時の同家中相良丈太夫が家來。三平が女房のお庄でござりますわいな。ハテナ。成程さういやれは見請けた様な。シテ此彌忠太には何の用。ハイお願ひがござります貴方様が國元を。お立退きなさるゝ折節。紛失致した吉光の刀。其通りで主人丈太夫家退轉。此刀が今でも出れば。主人の跡目相續致す。承れば當所の質屋。山家屋に質物になり。限月は切れたれどその置主さへ知れたれば。質札を買取り。此方へ請戻したさ。色々心を碎いて金子十五兩。才覺致して参りました。どうぞ其金で質札を。私へお賣り下されうならヤコレく何と言ひめす。スリヤ其質の置主を。この彌忠太ちやと聞召さつたか。イヤ左様でもござ

りませねど。それに又倉相千萬其置主は即ち盜賊。さしつけて身どもちやといやれば。此彌忠太を盜賊といふも同じ事。女と思ひ聞流せば。慮外至極とかさ押にきめ付くる。イヤ全く左様ではなければ。もし貴方がこの置主を。御存じならば。お知らせなされて下さりませいを打消して。ア、師走の果に左様の事。相手になる馬鹿があらうか。とはいふもの侍は相互尋ねてやるまいものでもないが。其詞儻りなくば十五兩の金子。そこに持つて居召されうの。イヤ旅宿に預けて置きました。ム、手前も只今急用で。他所へ参る明日参つて篤と談せう。お手前の旅宿は何處だ。ハイこんな事もあるうかと。則ち旅宿の所書。認めて置きましたと。無何心なう懐へ。ふつと氣の付く守袋。搜せど見えずはつと悔り。イヤコレく身も只今は心せき。重ねて候

りと早参ると。フシ袂ふり切り急ぎ行く。
 Ⅲア、これ申し今暫く。Ⅳエ、折もをり
 今の守りもし人に拾はれては久松様の身
 の大事。それも氣遣ひ。今来た道へ。イ
 ヤ〜。刀の詮議は延されぬと。我が身
 は一つ二筋道。フシ忠義一途に追うて行
 く。Ⅴ勘六に締上げられ。手をすりごう
 の痛い顔。Ⅵア、申し出します〜。出
 しあがれ。今働いたはこの守り。一步が八
 切。其儘でござります。まだればかり
 ぢやない。何もかも吐出しをろと。Ⅶせ
 ござ後に立聞く彌忠太。Ⅷヤアわりや勘
 六ぢやないか。ヲ、彌忠太様か。彌忠太
 かとは横道者。汝よ身共をやつたな。
 サ、何にも言はしやますな。コレ此
 紙入はお前のであらうがな。ヤ何が。ハ
 テサお前のぢや〜。中にはしつかり。
 これが日外の入替へ。ナえいかえ。ム、
 く〜いかにも身どもが紙入。よく盗んだ
 な。また〜コレ此印籠。ヲ、それも身ど
 もがのぢや。イエ〜その二色は。お前
 様のぢやござりませぬと。Ⅸいふを言は
 せずどう盗めと。二人が寄つて踏んづ蹴
 つ。いがみの物取る大盗人に。フシ命か
 ら〜逃げて行く。Ⅹ二人は跡を見廻し
 て。Ⅺ彌忠太様。先度の一貫五百目は。
 丁半でころりと仕舞うて。ちぎ文もおは
 しまさぬ。それで算用すつてにさんせ。
 エ、ふといやつ。さして此紙入には何程
 ある。ヤアこりやはした錢ぢやぞよ。う
 まい人ぢや銀なら何のこんなにやらう。
 マア〜腹立てさんすな。此守袋には。
 お性根が入つてあつたれど。そりやおれ
 が飲んで仕舞うて。あとに書いた物があ
 る。礎に證文と思はるゝ。おりや讀めぬに
 よつて。こな様に進上すると。Ⅻ渡せば
 取つて夜店の明り。Ⅼヤア、こりやこれ。
 お染と久松が起請。よい物が手に入つ
 た。油屋へ仕懸けてぐすりの種。コレ〜
 そんなら。二つ山ぢやぞやと。Ⅽ何でも
 取付くフシ餅屋の隣。Ⅾ待つた暫く。此
 小助も其仲間へ。入れて貰をと。Ⅿぬつ
 と出でたる男ぶり。久三の纏袴引きかへ
 て。一丁目脇指やつ仕立。當世風のフシ
 旦那衆頭。ⅰ彌忠太様何とえらいか。よ
 い事聞いた。祝ひに今夜は我等立てぢや
 〜。そりや過分なが。まだ一口儲けの手
 筋。片付けて跡から参らう。ヲ、此勘六も
 今一白取つてから。貴様の餅搗き祝ひに
 行かう。そんなら勝曼で待つて居る。打つ
 てくれ。シヤン〜も一つせい。しやん
 〜。祝うて三度おしやしやんのしやん
 しやん。〜しやんと引別れ。フシ腹糞
 も折柄よい時分。行かんとせしが立ちと
 まり。ⅱハア併しと。久しう行かぬ馬場
 先。田中屋へ行かうか。アイや〜彼
 奴が所はぶさ打つてある。それよ。勝曼

の色めが酸すっぱに。生姜入れて待つて居る筈。先づ此方へと廻行つては戻り。調ア、可愛や整刺のおふさが借錢の咄。正月屋

油屋の段

のぜんざいを。お前と氣入らずに喰ひたいたというたが。これも行きまし。體も飲みたし。地どうせうか。かう勝鬘六道の。辻に待つた以前の写ども。調こちらが仕事

フシ地難波詠めの。其中に名に大坂の鬼門角。油のしめ木引きしめて意見の種も後家育ち。山家屋へ嫁入の日數迫り大歳おととしの。拂ひは宵に片付けて春を壽く注連師しるし小オタリ松の。盛砂。高盛の飯椀いしづづらりと仕事師のフツタ飯時は賑はし。調ア、おさ

事。邪魔しをつた待めはソレそいつぢや。地たゝめくと三人が。有無を言はさず引立つる。夢見た様な。小助が難儀。悔り駈出す勸六を。そいつもぐるぢやと。掴み付く。心得立白とりんくの。餅に片足踏んごんで。べつたり尻餅しりもちあも重ね。運のつき曰。掴み付く。眞額まがねげんのみ五文取り。起上つては又ころく。取粉とりこなにまぶれて頬真白まがねだがどれやら味方同志。ぶつやら踏むやら暗まされ。跡をも見ずして 三馬さんば走り行く

つ殿使立つとせだててました。今日は大晦日一年中おととしの仕事納め。早う仕舞うて知行米ちぎらこめはマア腹へ取込んだ。此勸六めはどつちへうせだ。めんやう悪い辭ことばで飯時に飯は喰はず。又酒買ひにうせをつたか。あいつは大方さか兒こどもに生れをつたである。イヤく酒喰ひの筈はずぢや。あいつは藪やぶかぶりから成上つた奴やつぢやげなと。傍そばに居ぬ者もの譏り合ふ口の悪いはフシ缺徳利けつとく掲げて外から。調ヤイくく勸六が事こと譏りあがつたは長八めぢやな。イヤおれぢやない久兵衛

ぢや。イヤおれぢやないぞ。エ、喧しい。どいつこいつの用捨もちかたはない皆覺悟してけつかれ。人の錢借つては飲むまいし。おれが酒飲んだら汝等なんぢらが足でもひよろつかか。何のいのちつと傍そばあたりが熟柿じやくし臭いばつかり。吐はきしをんな。惣體おんたい油搾あぶらりといふ者は糲せ糲せ一つで働く商賣。取分とくぶんけておれは寒の師走も日の六月も。年中裸で暮す故だはの勸六と異名付いた男。此仕事せいでさえい錢を儲けるけれど。打入れ打上げる。けがな身に付はた例たとがない。汝なんぢらは錢が無いからえ喰はぬのぢや。おれが此喫くをかよしこますを有難いと思ひけつかれ。一盃入れて跡で飯も喰ふのぢや。此盛つてあるおれが飯にどいつでもほでさいたら腹袋はらふく裂くぞと。地何でもふしづく鬼の面おもて。ほつた腕うでは悪鬼の看板。障かざりらぬフシ神かみに祟まじなし。調仕事しごとの質しつさへ貰うたら往いんで早はやう年取としとらう。

ヲ、どうなと勝手にしをれ。おりや往まらうにも盆はなし。此酒の勢ひにぐつたりといつそ來年迄一腹入してこまそと。裏うらへ轉ま込む拗強おつちがへ者に。構かまはぬ手間取とるお家いへ様さまへよいやうに。詞ことばノニ此久三の小助は今朝からとんと顔見ぬなう。サア昨夜の年越からまだ戻らんせぬ。ム、年越からとあれば何所の豆を喰くひに往まかれた。

大かた納屋の下の陰裏豆かげうらまめ。地ちこちもいんでかゝの煎豆いりまめ。お福は内に待つて居よとフシ住家々々へ立歸る。増木綿まきわたでもなく絹ぬいでなく。せう事なしの山鷲やまじゆ納な。久三小助が廊通なごひオタリ勝曼かちまんの。茶屋で昨夜から。しゆつづく酒の二日酔ふたひよこそのお山に送おくられて瓦屋。橋はしにふつと氣が付き。

詞ことばヤアこりやうかゝ來て早やこちの内ぢや。もう往んでくれ。サア最前さいぜんからいねゝいぢやけれど。内方うちかたが見たさについで來た。ア、コリヤ覗のぞく手代

衆しゆが見やしやる。イヤサ手代どもは大事だいじないけれど。女どもが見たら恪氣こくきする。ちやつといね。そんなら旦那様だんなさまかた三日違ちがへなえと。地ちびんしやん歸るを待まち兼ねて。番部屋ばんべつの物陰ものかげで。著つかへる衣裳いさう縷いと子の帶おび。上う著つくる。すつぱりと元の。久三の尻しりからげ。急いそがし顔かほで竹箒たけしほ。

詞ことばノリ昨夜ののらの掃溜はきどを跡あとから拭ぬぐふ拭ぬぐき掃除そうじ手桶てづくの切水きづみばつと。地ち浮名うきなは餘あま所に立つぞとも知らぬ久松小隠ひさかつこかくに。恪氣こくき口説くちごとも聲高こゑたかに。いはれぬが、フシ苦くるの世界せかいなり。詞ことばお染ぞめ様さまそりや何おつしやる。許いひ嫁よめのおみつさへお前まへには見かへぬ私わたし。それに何の浮氣うきらしい外の色事いろごと所ところかいな。イヤ、何なにばさういやつても合點あてんがいかぬ。これ見や久様ひささまと書かいたお山の文ぶんが再また再來さいざいするは。どうでも茶屋狂ちやうきやうひしやるに極きよくつた。これは又また疑うたがひ深い。何所どこの奴やつがそんな狀さま。誓ちか私わたしが茶屋ちやうへ行いたら。地ち西さいか

ら日ひが出る東堀とうぼり。いづこ川筋かわすぢ師走しすいの懸取けんしゆ。詞ことば田中屋たなかやでござります。中拂ちゆうはらひの残り十貫じゆくわん五百文御算用頼ごさんりやうたのぞみます。ム、田中屋たなかやといふは覺おぼえぬがござらん何賣なんばいつたのぢや。イエ私は馬場先ばばのまへの茶屋ちやうでござります。久様ひささまにお目に懸かれば御合點ごあてん。女郎ぢやうらう衆しゆの取替とりかが六貫三百殘むつくわんさんひゃくざんりは御酒取看ごしゆとくけん。ア、これ滅めつ相あな。此久松馬場先このひさかつばばのまへとやらつひに往また事こともない覺おぼえないう。ハテこな様の知しつた事ことぢやない久様ひささまに逢あはして貰もらを。サア久松ひさかつは私わたしぢやわいの。イヤ久松ひさかつぢやない久ひさといふは此内このうちの旦那殿だんなどの。旦那だんなに逢あへば分わるこつちや。イヤ、そんな名なは愛あいに聞きいた。おれが名なは油屋あぶらやの久三郎ひさざぶろうとおつしやつた。久ひさはひさといふ字じ。そこでこの島しまでは久様ひささまといふわいの。エ、そんな事ことこちや知らぬ。知らぬぢや濟すまぬと聲高こゑたかに。地ち見みぬ顔かほしても居ゐられぬ小助せすけ。

門から手招き。調コレくく。爰ちやく。久三郎これにをる。イヤアお前は久様且那樣かと。悔りあたふた門口へ。調エ、不稔なやつではある内へ這入るといふ事があるものかい。デモお目に懸らにや濟まぬ出入。ぢやがお前はデモ薄いお姿で。そして御自身に門掃くとはこりやどうでござります。サイヤイ。大勢の人を使ふ者は旦那からかうして見せぬは廻るものぢやないわい。ハア聞えました。時に聞えませぬは日外からお風が變つて勝負へお出なさるゝげな。そしてこれ程の御身上に私が僅かの懸を。サアくくやるわい。ソレマア三步取つて置け。跡は後にこつちから男どもに持たしてやる。それも面倒いおれが直に持つて行く。そりや有難いそんなら必ず。違やせぬわい。これ迄算用せずには置いた。お山めが意氣方が悪さに肝癪で態と引摺つたのぢや。イヤそりや旦那お道理なれど。お山の肝癪で呼屋を踏むとは大きなつぼ。ソレ重井筒にもござります。踏むな呼屋に科もない。火燵にたんと火をいけて。待つて居ます。くわつとお立と。こそ屋はいきく。生玉さして、フシ立歸る。調コレ小助殿。この開がしい大晦日に何所へ往て居やしやつた。へ、前髪がなまちよこさい置いてくれ。久三と手代二人前の此小助。請拂は昨日しまふ。年越に除貫うて戻ると直にはき掃除。此働きが目に見えぬか。イヤくさうばかりぢやない。明日の節の柵家具藏へ行て出して来いと。か、様の言ひつけ。イエく藏の出し入れは久三の役ぢやござりませぬ。お氣に入りの久松。御寮様と連立つて行きや。それでは詞に角があつて氣の毒今のはわしが言損ひ。サアいつしよにと。傍輩の機嫌取る手をひつしよなく。調ハテ行けなら行くが邪魔になるがな。あすは元日。大かた姫始の取越しお染様の藏の鍵。あけましてお目出たうござります。エ、同じ傍輩で門口からお禮申す事さへならぬ。此久三には何がなると。掛けたい悪口傍輩情氣サナリぶつくさ。へ、咳き立つて行く。地年一日も、フシ暮れかゝる。地四十の浪も世話に寄る乳母のお庄は久松に尋ね。おぼさか油屋の。中戸に訪ひ。頼みませう。どなたと内より出合頭。調久松様か。ヲ、乳母か。よう來てたもつた。マアくこゝへと、地深切は。變らぬ中の、フシ行燈の陰。地男が先へ箱提燈點し立てたる禮衣裳。上下ためつけ山家屋佐四郎。歳暮のお禮とつゝと入る。調コリヤ喜八よ。今夜はこれで夜が更る。夜半前に迎ひに來い。お勝殿は奥にござるか。ハイさやうに申しませう。地暫くお待ちとつい立つて。行くも見送る主思

ひの。乳母が氣のつく煙草盆たばこ。ほんに幸ひよい折ちがから。調なご今日けふにもあなたへ參つてお尋ね申まをさしにやならぬ譯わけ。かの吉光の守刀。ア、これ一昨日けふも申す通り。其刀は手前質しちに取つたれども。もう疾とどうに流れました。サア其儀ぎは承うけりましたが。其置主おきぬしは。もし鈴木彌忠すずき やしただとは申しませぬか。イヤもういかい事の口數くちず。すゞきやら鱈たらやら。此方こなた覚えは致いたさぬと。地塵ぢじん灰かつかぬ詞ことばのしほ。お茶上げませうと久松ひさまつが。差出す茶碗ちawan。引つたくり。調なごエ、小じたたるい丁稚ていぢめぢやな。手入ていれらすの染茶碗ぞめawan。ちよこゝ破やぶりさうな頼たのみ。茶碗awanの代りに親方の前で。何もかもけつ破やぶつてこます。けふは後家ごけに逢あうてめつきしやつき。嫁よめ入いの延のびるも方圖ほうずがある。結納けつなおこしてから幾月いくげつになる。今夜けふや中なかつにお染ぞめを渡わたすか。さうなけりや結納けつなの證しるしの脇差わきざし一腰ひとし金拾かねしり兩りゆう。取戻とりもどしてこちらこなたから變改へんか。其代しろかりに又

借して置いた百二十貫目。蠶つゆまで算用さんようして取るのぢや。ア、案内案内しをれ丁稚ていぢめと。地ぢしやちこぼつたる麻袴あはばか持もつ。足の穂ほに顯あられ。問とはぬにそれとお乳ちちの人。そんなら利子りし二階にで待つて居ゐますぞえと。心殘こころざしして、ッ立たつて行く。地藏じざうからそつと小助せきすけが惡智慧あくぢゐ。小判こまがねの包封つかひ押切り。調なご先づ拾兩しりゆう忝かたじけなくい。此盜人このうどを久松ひさまつめに。さうぢや。くゝと一人ひとり笑わらふ。地人ぢじんに雜儀ざぎを塾じゆ文庫ぶんこの。中なかつへ目録めろく蓋かぶびつしやり。調なごッしめたぞしめたぞ。時に此金このかね。ちつとの間。何所なんどころぞに地奥ぢおくから小助せきすけ殿だんくゝと呼立よびたて出でづる下女げによのおさつ。調なごコレく小助せきすけ殿だん今奥いまおくで山家屋やまがやの旦那様だんなさまとお家様いへさまと。結納けつなを戻かへせと遣やつゝ返かへしつ其中そのうちに取交とせて。結納けつなの金が見えぬというて。大抵おほよその詮議せんぎぢやない。サアくゝごんせ。ヲ、くゝそこへくゝ。エ、どこへ隠かくして置おき所に。地事ぢじかく折敷せしき飯い椀わんの。高盛たかもちへ、ッつつ込む小判こまがねのこ

もく飯。上から押付け素そ知らぬ顔。打連うちづられて行く奥おくから口。目から鼻はなへッ抜目のない女おんな主ま。地後家ぢごけに負けぬは銀ぎんの利りの。かさにかゝつて聲山こゑやま家屋がや。調なごお勝様かちさま結納けつなの證しるし潔けつ白ぱくに戻かへさうと言いはしやつたから。今更いま否いなはいはれまい。サアくゝ戻して貰もらひましょ。サア今いまお聞きなさるゝ通り。大切たいせつにして簞笥たばこに入れ。しつかりと藏たくわに入れて置いた結納けつなの金拾兩かねしりゆう。今いまになつて見えぬといふは。コレ置おかしやれ。言掛ことづりで戻かへさうとはいうたれど。結納けつな戻せば百二十貫目ひゃくにじゅうに立てにやならぬ。所で何なにと引延ひす。てれんはたべぬ。人にこそよれ山家屋やまがやの佐四郎さしやう。一保いちぼが講釋かうしゃく三年さんねん聞いた男おとこぢや。そんな計略けいりやくに乗のつてたまるものかいの。が又噓うそでなくば其結納けつなお出しなされ。サアくゝ何なにとつつかゝる地主ぢぬしの當惑たうわく取とり分わけて。氣きの毒餘どくごる久松ひさまつ。調なご私が差出さしだがましけれど。大枚おほまいの銀ぎんさへ立てうと

あるお家様。纒か拾兩の金惜んで。何の間合仰しやらう。油屋商賣は大勢の仕事師。毎日入込む事なれば。誰が業かは知らねども失せたには違ひなし。私どもめいゝ身晴。共吟味して今夜中に。急度お目かけませう。お疑ひ晴らされませと。挿挨拶する程むつと顔。何がな小みづをくり出す勘六。フッおうへにどつさり大あくら。調コレ丁稚殿。貴様あぢいな事いふの。こゝの内に金が見えにや。仕事師のおいらが盗んだのか。イヤ〜さうではないわいの。イヤさういふのぢや。仕事師が大勢入込みうさんなといふからは。挿り仲間を盗人といふのぢや。殊におりや今日此頃の新面ぢや。猶以て耳に立つぞ。但し何ぞ證據があるか。ヨ。證據もないに盗人呼はり。けたいが悪いぞ。忌々しいぞ。ア、是々聲高にいやんないの。イヤ〜〜止めやんな小助。

あのせんまめ仕様があゝ。サ、尤もぢや〜。わがみの立たぬ様にはせぬ。マア〜待ちやいの。イヤ止めやんな〜。サア〜よいわいの。わがみの立たぬ様にはおれがせぬ。喧しい言やんな。古町ぢやわいの人が立つわいの。勘六正直ぢやさかいえらう腹立て召さる。ハ、ハ、ハ、イヤコレ久松。ちよとおぢや。サアいうてしまやいの。いへとは何を。ハテわがみが金盗んだ事を。コレ〜小助殿。そりや何いふのぢや。覚えもない事を。ハテ扱もう叶はぬ事を。其眞顔を厭ぢやわいの。證據の出ぬ中。サア綺麗にいうて仕舞うたがよからうぞや。サアおれにいや〜。エ、知らぬわいの。ヤ實正覚えなないか、エ、氣の毒ながら。證據出さすばなるまいと。久松が手習ひ文庫掲げ出で。調こりやこれわれが文庫。アノ佐四郎様から。結納の證について來た

目録。わが部屋の入物の中に。コレ〜に入れてあつたが通れぬ證據サ天命ぢやの。是でもわがみが盗まぬかと。挿差付けられても覚えなき。エ身の災難に詞なき。久松が胸づくし。取つて引据ゑ勘六が。調イヤばりめ。うぬが盗んだ金を人にぬつて。ようおれに紋付けたな。コレ〜勘六喧しういやんな。金の有所吐さねば。どづき据ゑて言はずのぢや。エ、挿吐しあがれと責めせつてふ。お勝は聲かけ小助待ちや。調エイお家様。なせお止めなされます。ハテ下人というても人の子。疵でもついたら何とする。殊に其金の盗人。急度久松には極らぬ。アノ。これ程知れた證據のあるに。サレバイヤい。其久松が文庫は。開いてあつたか錠がおりてあつたか。金盗む程の者なら。其目録は破つて捨てる筈の事を。我が科の知れる様に。わざ〜我が文庫に入れて

置いて。しかも蓋開けて置きさうなものか。但し。又錠がおりてあつたをそなたが開けたら。人の箱の錠捻切るは盗人の所作サそれならそちにも疑ひが懸るぞよ。サそれは。其様に手荒うせずと。諍かにしても詮議はなると。地ぎつくり詞の角屋敷納めた後家に。いらつく佐四郎。調ヤアそりやお勝殿最良のさばきぢや。現に知れた盗人の久松。そつちで詮議がならずば。町内へ斷つて代官所へ引摺つて行く。小助しめ上げて詮議しやいの。ハイ／＼合點と立ちかゝる。コリヤ主の詞を背くのかと。地主命流石うちつく腕。調小助せくな。此丁稚めは勘六に任せて置けと。地久松が前髪引付け平手でびつしやり。起直つて調コレ勘六。こりや何とするのぢや。大すりめ。小助は傍撃だけで手ぬるい。其日雇はれの勘六。どなたにも遠慮はない。金吐ささにや。商賣の油

の滓喰はずぞ。胴性骨の油糟。絞り出した言はさにや置かぬと。地主間へ引立て踏落され。髪もばら／＼あら涙こたへ兼ねて駆出る乳母。調マア／＼待つて下され待つていのと。地庭に駆けおり。調コレ久松様。お前の身に曇りのない言譯は私がする。ほんに／＼今でこそ町家の奉公。筋目正しい此和子に。そんなさもしい心があらうか。無念にごさんしよ。最前からお前より。私が口惜しうてならぬわいなアと。地背撫でマシさすれば。調ハ、ハ、ハ、何ぢやけたいな婆が出た。こくにも立たぬ言譯せずと。今爰でではの勘六が。盗人の政道するをよう見て置け。ぢやが酔醒で俄にぐつとひだるうなつた。飯一杯喰うて腹丈夫にしてから。どうするぞ待つてをれと。地飯椀引出し箸取りかゝれば小助はびつくり。調ア、コリヤ滅相な／＼。それはマア何するぞいやい。ヤ何するとは俺が飯をおれが喰ふのに。それが何で滅相な。イヤサ。それはいかにもわが飯さうなといふ事。サア。おれが飯ぢやによつて。ア、コリヤ／＼。その飯喰ふないやい。妙な事をいふ人ぢや。ム、ばりめを行ふのに隙があるといふのかよい／＼。そんなら飯喰ひ／＼やつてこませ。一責實めたら。白状さすは膳の上の箸と。地飯椀はなさぬ勘六。ア、これはまた情ない。ア、こりや。／＼／＼マアそれを下に置け。此飯は喰されぬわやい。エ、けたいな。そりや又何で。サイヤイ。金の盗人が知れぬ内は。仕事師にも皆疑ひが懸つてある。ヨウ。もしわが盗んだのなら。盗人に飯喰はず法があるか。身の垢を抜いた上で跡で喰へといふ事。ム、こりや理窟ぢや。そんならこいつもうしごいて仕舞はにやならぬ。ア、これ

これ大事のおれが扶持切米。物いひの付いた飯ぢや。やつぱりこゝに置いて貰を。様々の事で食どめられる。おれが爲には食敵。汝にはこれ喰はすと。割刺木提げ立ちかゝる。調勘六待ちや。家來の吟味は主がする。風人のそなたがいらざる差出扣へて居や。そんなら小助が。イヤわがみも頼まぬ。ヲ、すりやこな様の直の吟味。見物致そと突張る佐四郎。いやといはれぬ。此場の表。頼みませう。小助表に案内がある。小助々々ハイ~~~~。ハテどなたぢやと。出迎ふ門口。豫てや睨し相見を。互に見ぬ顔空とぼけ。拙者浪人者でござる。此度有付いて國方へ参るにつき。路用の拵へに手詰り。お家を見かけて御無心と申て唯は申さぬ。實は身の差合せ。賣りに参つた一品ちよと御覽下されと。懐より取出す一通。調コレ淨土宗一向宗にはなけ

ればならぬ圓光大師の一枚起請。寶か正筆かはたつた一目御覽じると忽ち知れる。お見知の手跡。ナ。なんと是ばかりは買はつしやれずばなるまい。天罰起請文の事。此跡を讀ますに。直を付けるが商ひの秘事。娘御に買うて進ぜられたら。一生の災難を遁れる。守本尊でござらうぞや。但し御所望にないか。ナニそれにござるお若人。其許にも入用の物ぢやお求めなされい。現當二世の起請文。イヤもう~~~~有難い御文章お望みならば。讀んでお聞かせ申さうかと。地意地くね悪う鬼門の肝先。調ドレ拜見致そかと。立寄る佐四郎は金神の。中からお庄が引取つて一枚起請買ひました。私に賣つて下さりませ。御不祥ながらと。ッシ差出す。金包み手に取上げ。調こりや僅か金拾五兩。こんな事では。サア~~~~それは當座の手附。ム、手附とあれば請取

つた。價は何程致さうと。わたしがアイ買ひます。今年は夫の十三年。この有難い御文章が。何と人手に渡されう。コレ久松様。お前の親御丈太夫様。預りの御重寶失うた科。阿房拂に逢ふのが無念さ。お覺悟の切腹。夫三平介錯の上。主人の追腹。お前は漸う六つの年。兄久作の在所へ預けわしは國に留まつて。どうぞ今一度相良の跡目相續の願ひ。御家老中へ月々の訴訟。其時失せた殿の重寶。この大坂の質屋にあると聞いたはお主の出世時と。其爲に拵へた此金なれど。差當つた地獄の苦患遁るゝは此一枚起請。其大切な事を何とも思はしやんせぬは。親御の恩を仇に思うて居さしやるから。コレ見やしやんせ。妙譽西岸信士。俗名三平。こりや私が夫の戒名。片時も肌身を放した事はない。お前の親御は。劍樹院等覺居士。其心では命日も。忘れてがな居さしやら

ろ。コレ此位牌の夫三平が。忠義の心を少しでも思ふ氣があるなら。爾來の約束。忝い御文章を反古にして。國へ歸つて命長ろ。家相續して。父御様に。地草葉の蔭からつこりと笑はしまして下されと。恨みも。意見も十分一明けていはれぬ百千萬。我が子の様に。養ひ君思ひ詰めたる眞實の。母より深い大恩慈悲。誤つた。もう堪忍して。とエエ歎けば涙拭いてやる。フシあまいは乳母の習ひなり。地敷きを餘所に山家屋が仲欠。ア、こりや盗人の詮議が來年になりさうな。イヤコレ御浪人。見た所がああ。跡金の才覺心許ない。手附限の事である。いつそおれ買ひましまか。イエ〜〜外へはやらぬ。私が先約。サア跡金は何ぼでござんす。惣高金は五百兩。エ、イ。安い物ぢや。サア只今請取らうと。聞いて今更ハットばかり。エエ當惑顔。

見て取るお勝。調イヤ〜。無儀ながらそりや出來まい五百兩なら私が買ひましょ。今がらりに渡さう程に。さつきの手附はあの人へお返しなされ。成程成程さうなうては叶はぬ處。めくさり金で大事の代物。買取らうとはのおとい女め。手附金ソレ返すと。お勝が取上げ。お侍様。こりや最前の手附とは違ひましたな。何が違つた。イヤ違ひました。中は見いでも知れてある。大かたこれは我様の質小判。ヤ。ア、そりや何か手前存ぜぬ。あの女が。イヤ仰しやんな。こりや最前の金ではないわしがよう見て置いた。あの人があつた金は反古に包んでござんした。是はこれ白紙。包が違うてあるからは。お前が内から拵へてござつたふきかへの質金。眞眞の金は懷にあらうがな。日外久松が騙られたも丁度此傳。これをたぐつて詮議したら。何が出ようも知れまいと。無儀な發明後家。暗い仕事は油屋の。明りにきよろつく。フシの皮。調イヤ其詮議よりこちらの詮議。ドリヤ。起請の正體を顯はしてお目にかけうと。地立寄る小助を勸六が。取つて突退け起請の一通。シツメに引裂いたり。調コリヤやい〜。大事の證據なぞ破つた。こつちへおこせと言はせも立てず。飯碗。調コリヤ何しをると掴みつ。頼にうが。ホンニ丁度拾兩。そんなら此盗人は。ヲ、こいつぢや。もう遁れぬわい。道理で飯惜み仕をると思つた。何でも三つ山の約束に。己一人よい事せうとはさ返つて。これからは久松が味方。何もかもいうて仕舞ふからは。どこへ尻が行かうも知れぬぞ。エ、もう赦されぬと取付く

を。腫^{ひび}腹^{はら}の當^{あた}身^み久三郎。きうともいはず目を白黒^{しろくろ}。一の裏は勘六が。みたの代りに山家屋もン^ン傍杖^{ぼうじょう}こはがる臙^{たは}鬱^ぼ色^{いろ}。罰サア佐四郎様。拾兩の金子出しましたぞえ。持つてお歸りなされませ。これでも私が盗みましたか。何のいの。正直^{しやうじき}正路^{しやうじ}な丁殿。有所^{しよ}さへ知れたら持つていぬには及ばぬわいの。ム、さうおつしやれば娘にも。言分はござりませぬか。何のあろぞいの。そんなら嫁入の日限^{ひまげん}は。春永に〜。ア長居致した。早ういんで稻積^{いなづま}みませうと。地^ちそこ〜に底氣味^{ちきみ}悪う彌忠^{やいちゆう}太も。そろ〜〜表へ。罰侍^{ばつじ}待つた。懐の金置いて行け。但し勘六が引出さうか。イヤ〜コレあの拾五兩は御文章の代金。深い志の金。お庄殿はわしが返す。どつこも波風ない様に。わざと何にもいはぬぞえ。ヲ、サ。身どもも何にも言分ない。地^ち強い顔でも胴震^{どうしん}ひ肝を菜種^{なづな}に油

屋の。辻からフン横に逃歸る。地^ちお庄はいそ〜。結構なお家様の御料簡で久松様の明りも忽ち。打つて變つた勘六殿。急に善^よ過ぎて合點が行かぬ。罰^{ばつ}コレ氣遣ひせまい此勘六。久松殿の肩持^{かみもち}たねばならぬ譯は。これ見て下され。腕^{うで}に卒都婆^{そとば}の入^い志^し。妙譽^{めいよ}西岸^{さいがん}信士。ホンニ此位牌^{このゐ}の戒名と。合うたは不思議。母者人健^{ぼしやじんけん}でござつたの。こな様の子の三之助でござつたの。ヤア。別れたは十四の年。見忘れたわいの。ヤア。別れたは十四の年。見忘れたさんしたも尤も。かういふ髮^{かみ}頬^ほになつたもの。一體が少さい時からいけずであつて。陪^{ばい}田^{でん}の悴^せの分^{ぶん}で。歴々の家中の子供業に碌^{ろく}打つたり頭^{あたま}はつたり。手討にもせにやならぬ處を。親父^{おやぢ}様の慈悲^じの勘當。間も無う死なしやつたと聞いてがつくり。始めてちつと人間の魂が出来たれば悲しや體^{たが}がみだれ同然。親の墓へさへ畫は得參らず。夜の中に寫して來た戒名。

命日に坊^{ぼく}様呼ばうにも。宿なしなれば佛縁は猶なし。せめて親の大恩を忘れぬ様に彫付けた。此腕^{かたな}がわしが佛壇^{ぶつだん}。置^お所^{しょ}が悪さに手を合はしては拜ませず。毎朝片一方^{いっぺん}の手でお禮を申しますわいの。餘所^{あま}ながら聞けば御主人丈太夫様。御切腹なされた元はといへば。紛失の吉光の刀。此大坂に質物に入つてある由。エ、是を請戻してお家を立つれば。お主へ忠義。親父様のお位牌へ。是に上こす手^て向^{むか}はないと思ひ立つた其日から。金の工面に様々の騙事^{たぶら}。日外^{にっがい}座摩^{ざま}ですりかへた其銀故に難儀さつしやる久松様が。主人の若旦那であつたとは夢三實。たつた今聞いて腸がひつくり返つた携^か的^{てき}。目當の外^{はら}れたも不孝^{ふけう}の罰母^{ばつぼ}者人。堪忍して。地^ち下^{くだ}さりませと眞實親身の後悔は。昔に返る稚^ち顔^{がほ}。其氣になつたら親子ぢやもの。何の憎かる。よう健^まで居てくれたな。母者人。懐^{なつか}し

かつたと抱付き。襦袢じゆばんの袖を。絞りが誠。
フシ大げ涙。殊勝じゆしょうなり。詞ヲ、親子の心
底感心しました。それ程に二人の衆が。
心を盡す吉光の守り刀は爰にあるぞや。
エ、そりや又どうして。お前のお手に。サ
ア縁は不思議と久松の人が。由ある人
と見た故に尋ねて聞いた氏素性うぢそせい。守刀の
入譯いりやく。廻り廻つて山家屋にあると聞出し。
お染を望むを幸ひに。こつちから乞うて
取つた結納むすびの證しるし。久松。そなたに是がやり
たいばかりに。嫌ふ娘を山家屋へやらね
ばならぬも爰の譯。これを土産みやげに本知ほんちに
歸れば。和泉の御家中相良久松様。地いづ
までも油屋の丁稚ぢやぢで居るが見目ではある
まい。まだ年の明かぬ中と。わしへの義
理や何やかや。譯もない事思はずと。早
う出世さしやんせと。渡す後家精あきらぬけめ
なき。フシ情にお庄むらが忝かたじけなみだ。地勝田
斐ひない我々が思ひ込んだ念が届いて。嬉

しいとも。有難いとも。詞久松様お禮を。
く。ア、これ。地禮は來年ゆるりと。詞
マア行かしやんせ。ホンニ母者人。うか
くして居る所ぢやない。今夜の内に藏
屋敷へお供して。お留守居へお見えな
されずば。歸參の顔が叶ふまい。サアく
く若旦那。早うくく久松はお染に引
かるゝ亂れ髪。撫付ける間もせはしなく。
フシ突出す鐘は。詞早や夜半。時刻が移
ると勘六が。地先に押立て駆け出す足首。
片息ながら取付く小助。投込むくどり戸。
詞御家様おさらば。御無事で。まめでと
地内と外隔つる。一夜大歳いっやうだいとしの鐘は。百八
煩惱ぼんぼを跡に見捨てて。三々さんさん念ねんぎ行く。地勝夫
跡にむざんや油屋のお染は一人娘氣ひとむすめに。
思ひ詰めたる久松に。別るゝ様子立聞たてきこに。
聞いて氣も消え胸せかれ。爰で添はれぬ
縁ならば。未來で積る白雪の庭へ。泣く
くフシをりからに。地親夫ちせんとこ詞お染お染く

と母のお勝が髣あやすれば。當アイくくとフシ
元の座敷へ立戻る。地お勝はさあらぬ
顔色にて。詞あすは目出たい元日。年の
終りは寝ぬものぢやげな。たとへさうな
うても。寺々の鐘の音ねで。腰られぬから持
病びょうの癢かゆが差込んで。アイタくく。ちつと
爰を押へたも。當地あいと娘は何氣な
く。手を差入れる懷かみをあけてそれとはい
はた帯。障る手先にお染は悔くり。詞母様
こりやお前腹帯ぢやないかいなと。地思
ひがけなき興きよう登頭とう。地娘そなた腹帯と
いふ者。して見やつたことがあるか。當エ
イ。いえくく何のママ。腹帯とやら。つい
に見た事も無いけれど。地お腹はらにやゝを
宿した時此様に。巻いて置くものぢやと
咄はなに聞いたばかり。地詞ヲ、よう知つて居
やる。いかにもこりや腹帯。イヤサア。癢
を押へる腹帯。此癢かゆの直る薬をコレ見や。
買うては置いたれど。下女にも男にも煎

じてもらふ人がない。わがみ大儀ながらこの藥。誰も人の見ぬ様に。こつそりと煎じてたも。嘗アノ母様の何いはしやんす。藥あがるに誰に遠慮。組詞イヤく人に見せられぬ。こりや此癩を押下げる。おろし藥。嘗エ、イ。組ヲ、肝が潰れう。娘の手前も、フシ恥かしけれど。地太右衛門殿に別れてから。後家は立てても離れぬ煩惱。鼠三右衛門の芝居に誘はれ。名はいはれぬが。美し若衆形をふつと見てから。思切るにも切られぬ惡縁。それが積つて情ないツイこんな癩になつたわいなう。調かういうたら定めてそなたの心では。母様の未練らしい。私らがそんな事が出来たら。井戸へなりと身を投げて死んでしまふに。卑怯な命惜むとも思やらうが。それではわが身ばかりぢやない。世間へはつと沙汰になつて。油屋の家はこれ限。地わしも色香を知りながら。

心に好かぬ山家屋へ。嫁入さすも家大切。調今の若衆形の事ふつくり思ひとまつた證據に。地おなかの癩をおろし藥。思ひ切つて煎じてたも。調折角佛様のお世話で。五月にもなつたもの。いちらしけれど。子を助ければ親が死ぬ。いひ交した男まで生きて居ぬ氣を知つた故。三方四方を納めるはコレ。地そなたの思ひきり一つとはいふものの體にも。子よりも孫は可愛といふに。初孫に日の目も見せず。水になせとの調欲を教へる母が心の中は。コレ鬼ぢやわいの。調男の爲親の爲。家相續の爲と思つて。氣に入らぬ嫁入してたも。コレ一生の頼みぢやと。地我が子を拜む母親の義理の腹帯しめ泣きに。嘗調いかにも嫁入致しませう。組ヲ、出かしやつた。くよう云うてたもつたのう。その代りにどうぞして。早う飽かれて戻る様に。わしや神神を祈つて居ると。地粹な親ほど取りわけて迫るせつなさ。童娘の心。互に思ひやるせなき親子の。誠ぞフシ道理なる。嘗夫太地や、時移り。久松は一度お染に暇乞。死ぬる覺悟に立戻り塀の外面にありぞとも。組知らずお勝はヲ、嬉しや。調翌日は目出たい元日。地泣顔ふいて神様へ何やかやお頼み申そ。サアおぢやいのと。フシ連れて行く。嘗地見越の枝に三尺帯ひらりと。内へ久松があはや人影見られじと潜む。暗き夜藏の戸のあいたを幸ひそつと入る。武跡からついて見濟す小助。外から戸前をどつさり鼠落しのフシ仕濟し顔。嘗地折から外には小提燈。雪の傘差しかゝる鈴木彌忠太。武跡を慕うて勘六が息もフシすたく。調彌忠太殿く一遍こなたを尋ねたわいの。嘗身どもに何ぞ用があるか。武ある段かく。こなたが盗んで立退いた吉光の守刀。質屋にあつ

て手に入つた故たつた今藏屋敷へ持つて往た處が。眞赤な寶物。正眞はこなたが持つて居よう。サア尋常に出したく。

昔ハ、ハ、ハ、いかにも推量の通り。質屋めに一杯喰はしたのぢや。正眞はおれが持つて往て立身の種にする。温かに渡してよいものか。武それ聞いたらもうよい。其刀は大方こゝにと。地柄にかける。昔手をもぎ放し。直にすらりと拔打ちを傘ではつしり。ッシ請身の手だれ。武境内は妹脊の縁側より庭の井筒に合掌し。童兩無阿彌陀佛の武聲聞取り。お染様か。昔ア久松か。二人どうでも死なねば。ならぬ身の上。未來は一所に手に手を取つて。組合ふ外の暗紛れ。武手に障つたる小脇差。探つて見れば九寸五分。扱こそ吉光。昔それやつてはと武者ぶり付くを。武ッッ踏み飛ばし。闘エ、忝い。武運の花の開き時。久松様は。何所にござると。

地それと白雪白壁の。藏と庭とにまむあみだ。二人アツと苦しむ一聲に。武驚くお勝久三の小助。久松めはくたばつたと。呼はり出づるを取つて引敷き。闘エ、早まつた御最期と。二人地恨むに甲斐も百八の鐘も打切りしらく。明けかはいの聲と諸共に。年の終りに明け渡る。春を重ねて久松が。名は大坂の東堀今に。傳へて残りける

安永九年庚子九月廿八日

花の開き時。久松様は。何所にござると。